

そうか!やってみよう

氷を作ろう

学校法人札幌ナザレン学園 こひつじ幼稚園（北海道札幌市） [4歳児]

<事前の様子> 外で遊んで帰ってきたスキーウェアのフードに入っていた雪を、保育者はガラスビンに入れて、机の上に置いた。子どもたちは「何かな?」と、溶けていく様子を見ながら「『雪を食べたら、お腹を壊す』と母親に言われた」話をしていた。「何かいっぱい浮かんで」「汚い感じだ」「雪ってこんなに汚いの?」「シロップをかけたら、かき氷になるのに。残念だ」「真っ白な雪がどうして汚いの?」「排気ガスのせいだって、お母さんが言ってた」「飛行機のせいもだな」「飛行機も自動車もない山の雪は食べられるかもしれない」「このビンの水は、排気ガスのカスなんだね」「排気ガスのカスって、いつもは見えないけど、雪に変身して溶けたら見えるんだな」と、何故汚いのが話題になった。その後、「(気温が) マイナスの日、きれいな氷をいっぱい作ろう」と氷作りに気持ちが動いていった。

	子どもの様子	読み取り
考え合う・試す	<ul style="list-style-type: none"> ・5歳児の様々な氷の情報を耳にし、アイス作りを楽しんだことから興味は高まっていた。外に出ると、バケツに氷が張ってあることに気付いて思わず触ってみるが、薄い氷はたちまち溶けてしまった。 ・「もっと大きい氷できないかな?」「水をたくさん入れたらいいんじゃない?」「バケツを集めよう」「本当に氷になるかな?」「なったらすごいね」「明日まで待たないといけないね」「楽しみだね」など話し合い、たくさんのバケツに水を汲み、玄関に並べる。 ・帰りに覗くと、まだ水だった。 	<ul style="list-style-type: none"> *子どもの関心事に心を傾け、思いを支えていきたいと思った。冬の遊びを通し、心揺さぶられる大発見を仲間と共感し合う心地よさを味わわせたい。 *子どもたちは、その現象に再び、心が揺さぶられたと感じた。 *「明日まで待つ」という時間の間、わくわくする気持ちが高まっていく。同じ夢をもつ仲間と楽しみを待つから、より楽しい。
実現・観察・工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・翌日、バケツを見に行く。「わあ!凍ってる」「成功だ!」「バケツから出してみよう」氷を出す。「水が出てきた」「穴が空いている」「バケツの形なのに中は水だよ」「すごい」「雪を入れてみようか」「色水を入れよう」「ケーキみたいだね!」「きれいだね!」と言い観る。 ・水を入れて観ながら「水を入れると雪も氷もどんどん溶けていくね」「全部溶けちゃった」「面白い」と話す。 ・「明日はもっとたくさん作ろうよ」「牛乳パックで氷はできるのかな?」「四角いのができるのかな?」「色水を入れたらどうなる?」「やってみないとね!氷ができますように」と話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> *面白いがる心をもっと揺さぶりたいと思った。 *心揺さぶられている大発見をとことん仲間と共感し合いながら、冬の魅力を感じさせたいと願った。 *様々な入れ物に氷を作ることを楽しんでいる。(翌日から連日楽しむようになった。)
マイナスの気温を感じる・表現する	<ul style="list-style-type: none"> ・氷を見に行く。「あれ?どうして真ん中はへこむの?」「四角くならないのもある」「穴が開いた」「どうして真ん中はケムシみたいにゲジゲジなんだろう?」「ケムシの琥珀の宝石みたいだ」「生きているみたいだ。面白い」と話す。子どもたちはバケツや牛乳パック、風船に水を入れて朝を待つことにする。子どもたちは、期待して降園する。 ・(予想通り、-5℃の寒い日)みんな凍った!すごく凍った!と喜ぶ。「わっ!バケツが丸い!」「太っちゃだ!」「バケツの氷も丸いぞ!」「風船は真ん丸氷!」「牛乳パックも膨れてる」「年長組のスケートリンクも凍ったんだよ」「温度計を見てみよう」「0より下はマイナスって言うよ」「今はマイナス5度だ」「マイナスってなに?」という話題になる。 ・保育者が「スキーウェアも手袋も着けずに外に出よう」と提案する。「寒い」「手が痛い。顔が痛い」「カチンコチンの日だ」「キンキンに寒い」「マイナスってすごい寒いんだ」「マイナスだから凍ったの?」「鼻水も凍るぞ!」「自分たちも凍っちゃおうよ」と言い、寒さを体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> *子どもたちの表現は実に豊かで、凍らなかった現象を、知っている虫に例える。また、その表現が仲間によくわかり合える。子どもたちの世界に、難しい科学の専門用語は無用である。 *気温により氷ができる日とできない日があることや、水が凍ると膨張する現象を、遊びの中で楽しんで感じていく。宝石ができることやバケツが膨らむほどのマイナスという気温や寒さを、身をもって感じている。 

ポイント

北海道の冬の生活の中では日常的な「寒さ」や「雪」を、この事例のように意識することができるような環境を設定することで、子どもたちは体験を通して幼児らしい気付きや発見による学びをしています。「雪はきれいか否か」や「氷のでき方」の不思議さや疑問、「氷の美しさ」や「マイナスになる気温」に関する感覚・感性などを、思い思いに話し合い遊びを進めることで、学びを生かした展開を楽しむことに結び付いています。